

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 問題を解決する／学校法人支倉学園 めるへの森幼稚園

子どもたちが遊びを楽しむとは、どのような姿でしょう？  
夢中になって遊ぶ子どもたちは、困ったことや困難を感じた時、どのような姿になるでしょうか？この事例の子どもたちは、困ったことがクラスみんなの問題になり、みんなで話し合っ乗り越えています。多くの子どもたちが考えを表わしていることや、絵本や家族からの情報が手がかりになったことが分かります。



### ● 樹液を作ろう／4歳児

豊かな自然環境の広い公園が隣接している。子どもたちはこの公園で、随時多様な遊びを楽しんでいる。昨年、樹液に興味を深めた5歳児の刺激を受け、4歳児も樹液への興味を深めていた。飼っているカブトムシの蛹が羽化する頃になり、子どもたちは「成虫のカブトムシは、幼虫の時とは食べ物が変わり樹液を食べる」と知った。そこで、公園に樹液を探しに行ったが樹液は見付からず、無くなっていて落胆した。

しかし、絵本「じゅえきレストラン<sup>※</sup>」を楽しんだり、家庭から情報を聞いてきたりすることで、「樹液を作ろう」と話し合った。

<sup>※</sup>[じゅえきレストラン ふしぎいっぱい写真絵本、文・写真新開孝 ポプラ社](#)



### ✿ 事例：樹液を作る（6月中旬）

#### ● 作り方の話し合い

Aさん：「『じゅえきレストラン』で“じゅえきにははっぱのえいようぶんがたっぷり”って書いてあったから、樹液は葉っぱでできているんじゃない？」

Bさん：「でも、樹液は茶色だけど葉っぱは緑だから違うんじゃない？」

Cさん：「みんなも先生も虫に変身して、虫の気持ちになってみて“おいしい”と思う樹液を作ろう。おいしいじゅえきレストランを作ろう！」

と話し合う。

みんなで話し合い、材料を「りんご、アイス、はちみつ、バター、わたあめ、バナナ、黒砂糖、焼酎にしよう」と考えた。

Dさん：「全部混ぜる」

Eさん：「樹液はとろとろだからとろとろにしよう」

Fさん：「バナナはつぶすってお母さんが言った」

Gさん：「手でつぶそう」

Hさん：「手、べたべたになるよ」

Iさん：「フォーク使うといいんじゃない？」

Jさん：「つぶせるよ！」

Kさん：「ちょっと硬いから大変そう」



さらに、「踏んでみるのは？」「包丁で切るのは？」「でも、とろとろにならないよ」「幼稚園に小さくすりおろせる道具があるよ」と話し合いが進む。バナナはフォーク、りんごはすりおろし器を使う。

使う材料や用具を集めて、みんなで作る。

## ● 考察

今まで樹液を十分に見たり触ったりした経験から、「自分たちが知っている樹液と同じようにとろとろに作りたい」と考えたのではないだろうか。また、とろとろにするためにはどうすればいいかと子どもたちなりに考え、その為に必要な道具を保育者と一緒に決めることができた。自分たちなりに考え、試すことの楽しさを感じられるようになってきている。本物の樹液の匂いを嗅いだ時は臭く、本物の樹液とは少し違うと感じた子どももいたようだったが、自分たちで考えた物を形として創り出せたこと、作った樹液がおいしかったことへの満足感の方が上回り、そのことが喜びや自信になり、実際に木に付けて試すことへの期待が大きく膨らんだようだ。

## ✦ できた樹液を本物の樹液と比べる

Lさん：「本当の樹液もとろとろしてたから同じだ」

Iさん：「とろとろになった」

Eさん：「おいしい匂いがするから本物の樹液と違う」

Mさん：「わたあめの匂いがする！」

Fさん：「べたべたするから樹液と似てるよね」



## ● 木にくっ付けてみると…

「本物の樹液みたいにべたべたする！」

「見て！木にくっ付いた！」

「本物の樹液に見えるね」

「本当の樹液は黄色だったから色ちょっと違う」

「時間がたてば黄色になるんだよ」

「そして茶色になるんだよ」

「ここ（低いところ）に付けたらアリが食べるよ」

「高い所に付けたらカブトムシが食べるんじゃない？」

「虫、食べるかな？」

「カブトムシとかは夜来るから、夜に食べると思うよ」

「じゃあ、明日見に来たらいいんじゃない？」

とやりとりをする。



## ● 翌日、樹液を見に行く。

### 食べられた！？

Dさん：「樹液なくなってるよ！！」

Eさん：「本当に！？」

Nさん：「見て！アリが食べてるよ！」

Oさん：「まだくっ付いてるのもある」「食べて嬉しいね！」

### くっ付いてるのは…！？

Pさん：「本当の樹液も硬いのあるから同じだ！」

Qさん：「硬くなってる！！」

### 成功だと思った子どもの声

Lさん：「高いところの樹液はなくなってたから、カブトムシが夜に来て食べてったんだと思う」

Mさん：「アリが『おいしい』って言ってたよ。わたあめ入ってておいしかったんだよ」

Rさん：「最初は、赤ちゃんアリが樹液を見つけて、お母さんアリとかに教えて、みんなで食べに来てたんだよ」

Nさん：「上の方の樹液はなくなってたけど、下のはあった」

Sさん：「アリたちがみんな食べちゃった！」

Tさん：「虫が夜食べちゃって面白かった！」

Gさん：「アリは匂いにおびき寄せられたんだと思う」

#### 残念だと思った子どもの声

Fさん：「アリは食べてたけど、カブトムシはいなかったね」

Eさん：「どうしてカブトムシは食べないのかな？」

## ● 考察

子どもたちは「虫が食べたんだ」「成功だ」と喜び、アリの気持ちや、夜の樹液レストランの様子を想像し楽しんでいました。年中児は想像の世界も現実のことのように捉えることが多いので、保育者は子どもの心に沿った言葉かけをし、心豊かに、また自由な発想を広げていけるようサポートしていくことが大切だと感じた。アリがいたり、樹液がなくなっていたりしたことから、ほとんどの子どもたちは成功と思い満足していたが、カブトムシに来てほしいと思っていた子どもたちはカブトムシがないことを残念に思っていた。保育者は“その子どもたちにも満足してほしい”と思い、また、その子どもたちの気持ちをクラスの子どもたちに投げかけることで、考える力、想像力、創造力が育つきっかけになるのではないかと考えた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」